

馬琴読本の平仮名字体

——『月水奇縁』『椿説弓張月』『南総里見八犬伝』を資料に——

市 地 英

1

近世の平仮名字体の研究は、浜田啓介（一九七九）で時代を下るにつれて収斂する傾向が指摘されて以来、その傾向を確かに裏付ける研究成果が得られている。これまで、黄表紙を中心に、合巻、赤本、洒落本、滑稽本、咄本、浄瑠璃本、人情本といったジャンルに一作品は調査が及び、基本として用いられる平仮名字体の種類や、共通する用法があることが分かっている。しかし、近世後期の戯作作品は未だ調査するべき資料が多い。

浜田（一九七九）で収斂の指標としている「馬琴読本類」「草双紙類」は、「馬琴読本類」が先、「草双紙類」が後の時代のジャンルとされ、平仮名字体総種類数の平均値が示されている。その結果、「馬琴読本類」の平均値が高いとして¹⁾いるが、資料の年代を確かめると「草双紙類」は全体的に読本より前の出版年である。読本には特別、平仮名字体を多めに使う傾向があったと推測される。こうした傾向を、具体的な字体の種類と用法で裏付けることで、単純化に反した平仮名字体の実態を浮き彫りにできると考えられる。本稿で

は戯作のジャンルと平仮名字体の関係に重きを置き、後期読本の代表作家である曲亭馬琴の読本三作品を資料に、平仮名字体の種類、草双紙等との共通点、読本にみられた字体の用法について論じたい。教養層の娯楽小説とされる読本の調査は、前田富祺（一九七二）で前期読本『雨月物語』の平仮名字母の種類と使用量が検討されているほか、先述した浜田（一九七九）において「馬琴読本類」のくくりで平仮名字体の種類数のみが提示されているのみである。

読本は戯作の中でも別格視されていたと考えられ、馬琴は『近世物之本江戸作者部類』（天保五年刊）の巻之一を「赤本・洒落本・中本の部」とし、巻之二を「読本作者之部」としている。ジャンルを分けた理由を、馬琴は巻之一の巻末に「赤本・洒落本・中本・読本の如き、各その差^{シヤ}ありといへども、戯墨は則一なり。但その文に雅俗あり、作者の用意も亦同じからず。この故にその部を分ちて詳にせざることを得ず³⁾。」と述べ、同じ戯作の中でも読本に力を入れ、区別していたと分かる。また、式亭三馬は「讀本は上菓^{ウラハ}子にて。草雙子は駄菓子也⁴⁾。」と述べている。

内田宗一（一九九八a）の調査で洒落本と黄表紙に平仮名字体の

種類に差が見出され、洒落本の行数が決まっているなど体裁の違いが平仮名字体の選択に影響が出る点が検討されている。同じことが読本にもいえ、ジャンルの違いに分け入る余地のあるといえる。

調査資料は後期読本の代表作家である曲亭馬琴の著作にした。

『近世物之本江戸作者部類』に「多く行われたり」としてしている三作品である。資料と調査範囲を次に記す。

【復讐月水音縁】（文化二年） 卷之一 八丁オウ廿六丁オ

【小説弓張月 前篇】（文化四年） 卷之一 七ノ下ウゝ三十一

丁ウ

【南総里見八犬伝 肇輯】（文化十一年） 卷之一 九丁オゝ三

十丁ウ

いずれも本文の平仮名字体のみを調査した。『椿説弓張月』『南総里見八犬伝』が人気を博したことはいうまでもなく、『月水音縁』は馬琴読本で初めての売れた作である。この三作品のみで表記の一般性を断定することはできないものの、共通する用法や各作品の比較から読本の平仮名字体の一端を探ることはできよう。

2

三作品の平仮名字体の総種類数をみると、月水106、弓張月103、八犬伝92と、月水が最も多く、最も少ない八犬伝は月水・弓張月と一〇種類以上の差がある。これら三作品の種類数を先行研究で明らかになっている黄表紙の字体総種類数と比較すると、三作品とも黄表紙を上回り、やや少なめにみえる八犬伝も大体の黄表紙より種類が

豊富である。

複数の字体が使用される仮名の数の分布をみると、表1の通りになる。一つの仮名あたり一〜五種類を使用し、二種類の字体を使用している場合が最も多い。どの読本においても四十八の仮名のうち三十以上の仮名に複数の字体が当てられているが、二種類以上の字体が使用される仮名の数は月水が36、弓張月33、八犬伝30の順に多い。

使用されている平仮名字体の種類は共通しているものが多いものの、共通しない字体もある。三作品に共通した字体、二作品に共通していた字体と、その作品にしかなかった字体を分けると、A〜Gまでに分類でき、次のようになる。⁽⁸⁾

A. 三作品に共通

・一種類 (22)

【あ】 【う】 【え】 【お】 【さ】 【せ】
 【そ】 【ち】 【と】 【ぬ】 【へ】 【三】
 【む】 【め】 【毛】 【よ】 【ら】 【ろ】
 【王】 【ゐ】 【ゑ】 【ん】

表1 複数の字体が使用される仮名の数

| | 二種類 | 三種類 | 四種類 | 五種類 | 計 |
|---------|-----|-----|-----|-----|----|
| 月水音縁 | 21 | 9 | 5 | 1 | 36 |
| 椿説弓張月 | 19 | 9 | 2 | 3 | 33 |
| 南総里見八犬伝 | 21 | 6 | 2 | 1 | 30 |

・二種類 (23)

【い】【以】【可1】【か】【き】【起】【く1】【く2】【け】【介】
 【こ】【古】【し1】【志】【春】【須1】【多】【た】【つ】【川1】
 【て】【天】【奈1】【な】【尔1】【尔2】【ね】【年】【の】【能】
 1 【ひ】【飛】【ふ】【婦】【本】【保】【毛1】【毛4】【や】
 【也】【り】【里】【れ】【連】【を】【越】

・三種類 (3)

【者】【八】【盤1】【ま】【末】【満2】【る1】【る2】【類】

B. 月氷・弓張月に共通

【阿】【可2】【川2】【徒】【登】【に】【耳1】【毛2】【由2】
 【累】

C. 弓張月・八犬伝に共通した平仮名字体

【し2】 【と3】 【ほ】 【免1】 【ら3】 【流1】

D. 月氷・八犬伝に共通

【乃】 【満1】 【み】

E. 月氷のみ

【お2】 【於】 【佐】 【須2】 【世】 【堂】 【亭】 【と2】 【那】
 【耳2】 【能2】 【盤2】 【免2】 【遍】 【ら2】

F. 弓張月のみ

【希】 【す】 【せ2】 【津】 【奈2】 【奈3】 【丹】 【も】 【路】
 【衿】 【は】 【毛3】 【流2】

G. 八犬伝のみ

特筆すべきことに、三作品とも(ル)に四〜五種類の字体がみられる点が挙げられる。草双紙などは【る1】【る2】のみのことが多く、読本に特徴的である。

Aは四十八の仮名の字体が揃っており、三作品に概ね共通した字体が使われていると分かる。大体が草双紙などにも必ず使用される種類だが、【古】【須1】【た】【な】【能1】【盤1】【飛】【保】【婦】【満2】【み】【毛4】【類】【越】は、当たり前前に使われる字体ではない。

B以降の□で囲った【と2】【と3】、【免1】、【免2】、【毛2】【毛3】【も】、【ら2】【ら3】は互いに似た形状の字体で、Aの字体【と1】【め】【毛1】【ら1】と対になる字体である。(メ)の字体以外は先行研究において使い分けが指摘され、同じような用法が読本に期待できる。

□以外のB・C・Dの字体は、草双紙等に当たり前に使われるとはいえない字体である。

Eの月氷のみの字体は12種類もみられる。【於】【須2】【世】【耳2】【能2】【盤2】【免2】、漢字に近い字体が多いのが特徴的であ

る。【堂】は『雨月物語』に使用例があるが、草双紙には一切使われていない報告のない字体である。

Fの弓張月のみの字体も多めといえるが、Aに分類される【せ1】【奈1】【毛1】と画数が異なるだけの【せ2】【奈2】【も】【毛2】といった字体を含む。また、【す】は草双紙によく使われる字体で、月氷と比べて字体が単純なものが多く印象である。

八犬伝しかみられない【流2】は【流1】の運筆違いのバリエーションである。【衿】は、合巻や黄表紙、滑稽本、人情本など使用されることがある。

Bの【川2】【徒】や【由2】、Cの【し2】、Dの【満1】、Fの【す】などは黄表紙ほかよく戯作にみられる字体である。こうした字体が必ずAに含まれるわけではないというのは注目に値する。

各作品の種類は概ね共通するも、個別に特色が窺われる面がある。しかし、今回はAの字体を中心に検討する。読本三作品に先行研究で指摘されている用法と通じるのか、また草双紙にはさほど使われない字体の用法に注目していきたい。

3

Aに分類した字体の使用量や用法を確かめると、草双紙などで使われるときにはみられない用法を持つものを含む。従来指摘されていた用法のある字体と、読本に特徴的な用法のある字体を分けて述べていきたい。

二種類以上の字体がみられた仮名と、Aに分類される字体【と

1】【毛1】【め】【ら1】と□で囲った【と2】【と3】、【免1】【免2】、【毛2】【毛3】【も】、【ら2】【ら3】を検討する。表2に該当する仮名の自立語の位置、付属語、その仮名一字の助詞・助動詞を分類して示した。ただし〈ス〉のみ分け方を異にしたので後述する。

先行研究で指摘されているのと同じ用法がみられた字体は、次の通りである。

〈カ〉―【可1】【か】〈キ〉―【き】【起】〈ク〉―【く1】
 【く2】〈ケ〉―【け】【介】〈コ〉―【こ】【古】〈シ〉―
 【し1】【志】〈ツ〉―【つ】【川1】〈テ〉―【て】【天】
 〈ト〉―【と1】【と2】【と3】〈ニ〉―【尔1】【尔2】
 〈ネ〉―【ね】【年】〈ハ〉―【者】【八】【盤1】〈モ〉―【毛1】【毛2】【毛3】【も】〈ヤ〉―【や】【也】

【か】【志】が語頭、【起】が非語頭といった使い分けは、先行研究で例外なく見出せるものとなっている。平仮名中心の文章において、そうした使い分けは表語機能となっており、語の切れ目を分かりやすくするといわれているが、漢字仮名交じり文の読本においても同様の用法があると分かった。これを3―1で述べる。

読本三作品に特有の用法があった字体は次の通りである。

〈ス〉―【春】【須1】【ノ】―【の】【能1】〈フ〉―【ふ】
 【婦】【ホ】―【本】【保】〈マ〉―【ま】【末】【満2】〈リ〉
 ー【り】【里】〈レ〉―【れ】【連】

草双紙などと同じ用法がみられた字体にも個別の問題はあるが、

右に挙げたのは特に顕著だったものである。右を3―2で述べる。

一 作品にのみ特殊な用法がみられたものは次の仮名である。

〈イ〉―【い】【以】―〈タ〉―【多1】【た】―〈ヒ〉―【ひ】【飛】
 〈メ〉―【め】【免1】【免2】―〈ヲ〉―【を】【越】

これらは3―3で述べる。

用法に強い傾向がみられない字体もあり、それらは先に挙げた分類に含めない。3―3に付け加える形で最後に述べる。

〈ナ〉―【奈1】【な】―〈ユ〉―【ゆ】【由1】
 〈ラ〉―【ら1】―【ら2】―【ら3】―〈ル〉―【る1】―【る2】【類】

3―1

まず、先行研究の指摘と同じ用法がみられた字体を述べる。

〈カ〉は語の位置に関係なく使われる【可1】と、語頭・準語頭に使われる【か】の使い分けが読本にも顕著であった。助詞「が」は【可1】が占め、そのため【可1】の使用量は月水155、弓張月297、八犬伝25と多い。自立語の語頭・準語頭の用例は【か】と【可1】の両方がある。【か】に用例が多いのは「かゝる」（月水…3、弓張月…8、八犬伝…3）「かくて」（弓張月…3、八犬伝…7）といった連体詞や副詞、ときに「かいつかみ」「かしこみて」といった動詞も書かれる。【可1】は接続詞的な「かた」や、準語頭「吼か、る」（「吼かゝりて」2「大かた」4と漢字と合わさっている複合動詞が多い。語や文においてどのような要素かが【可1】【か】の使い分けに影響している。月水には【か】を係助詞「か」終助詞「か

も」【かし】に使う例がある。「かも」「かし」は語頭と捉えたかと考えられ、係助詞「か」は「ゆく・かと」（廿五丁ウ）と連綿によってひとまとまりになっている頭に使用されている。また、八犬伝に唯一「か」が「うたかた」と語中に使われたが、「うた・かた」と解釈したかと考えられる。

〈キ〉の【き】【起】は、【き】が汎用の字体、【起】が非語頭の字体という傾向が三作品に共通する。月水では【き】8【起】51、八犬伝では【き】18【起】108と【起】の使用量が多く、弓張月は【起】25【き】75と【起】が【き】の半分以下の使用量である。語末の字体の分布をみると、月水は【き】1【起】30、八犬伝は【き】10【起】66と二作品では【起】が上回るが、弓張月の語末は【き】40【起】14と【き】が多い。加えて助動詞も月水と八犬伝は「べき」（月水7、八犬伝11）、「なき」（月水7、八犬伝11）、「まじき」（八犬伝1）、「き」（八犬伝2）が、すべて【起】で書かれる。弓張月は「なき」／【き】9【起】1、「べき」／【き】14【起】3、「まじき」／【き】1と【き】に偏る。【起】の用法は共通しているが、資料によって使用割合が異なる。

〈ク〉は【く1】が非語頭、横幅に広い【く2】が非語末に用いられる。用例は【く1】は「とまれかくまれ」「むくく」「かくて」「いへらく」「ふかく」「ゆく」等で、副詞、接続詞、動詞や形容詞の活用語尾に使用される。【く2】は月水に語頭「くらく」2「くふうする」「くる、」等、語中「うくる」「おくり」「名づくる」等、弓張月に語頭「くろみ」「くれて」「くつろげて」、準語頭「狩

表 2-1 三作品に共通した複数の字体の使い分け ([] 内にその字体の総数、助詞はその字体一文字のみで文中に表れるもの)

| | 付属語 | 語末 | 語中 | 準語頭 | 語頭 | | | | | 語末 | 語中 | 準語頭 | 語頭 | | |
|--|-----|-----|-----|-----|-----|-----------------|------|-----|-----|----|-----|----------------|-----------------|-----------------|------|
| | 12 | 0 | 1 | 0 | 0 | 介 [13] | 月水音縁 | | | 0 | 0 | 1 | 62 | い [67] | 月水音縁 |
| | 12 | 6 | 15 | 0 | 0 | け [28] | 月水音縁 | | | 0 | 0 | 1 | 20 | 以 [21] | 月水音縁 |
| | 46 | 0 | 3 | 0 | 3 | 介 [57] | 弓張月 | | | 0 | 2 | 0 | 97 | い [99] | 弓張月 |
| | 2 | 8 | 8 | 0 | 2 | け [20] | | | | 0 | 1 | 0 | 1 | 以 [2] | 弓張月 |
| | 5 | 0 | 1 | 0 | 0 | 希 [6] | 八犬伝 | | | 0 | 0 | 0 | 95 | い [95] | 八犬伝 |
| | 26 | 0 | 2 | 0 | 0 | 介 [28] | | | | 0 | 1 | 0 | 3 | 以 [4] | 八犬伝 |
| | 28 | 11 | 18 | 0 | 6 | け [63] | 八犬伝 | 付属語 | 助詞が | 語末 | 語中 | 準語頭 | 語頭 | | |
| | 付属語 | 語末 | 語中 | 準語頭 | 語頭 | | | 22 | 39 | 2 | 69 | 10 | 13 | 可 1 [155] | 月水音縁 |
| | 6 | 0 | 22 | 0 | 88 | こ [116] | 月水音縁 | 3 | 0 | 0 | 0 | 3 | 15 | か [21] | |
| | 0 | 0 | 0 | 1 | 16 | 占 [17] | 弓張月 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 可 2 [1] | 弓張月 |
| | 10 | 1 | 16 | 6 | 120 | こ [153] | | 48 | 80 | 20 | 113 | 25 | 21 | 可 1 [297] | |
| | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 占 [2] | 八犬伝 | 0 | 0 | 0 | 0 | 9 | 26 | か [35] | 八犬伝 |
| | 0 | 0 | 2 | 2 | 68 | こ [72] | | 1 | 2 | 1 | 8 | 0 | 0 | 可 2 [11] | |
| | 0 | 0 | 0 | 0 | 23 | 占 [23] | 57 | 50 | 19 | 82 | 27 | 11 | 可 1 [245] | | |
| | 付属語 | 語末 | 語中 | 準語頭 | 語頭 | | | 0 | 0 | 0 | 1 | 6 | 31 | か [38] | |
| | 64 | 86 | 82 | 4 | 0 | し 1 [236] | 月水音縁 | 付属語 | 語末 | 語中 | 準語頭 | 語頭 | | | |
| | 0 | 0 | 10 | 6 | 29 | 志 [45] | 弓張月 | 0 | 1 | 3 | 1 | 3 | き [8] | 月水音縁 | |
| | 55 | 124 | 91 | 0 | 0 | し 1 [344] | | 14 | 30 | 7 | 0 | 0 | 起 [51] | | |
| | 0 | 0 | 0 | 4 | 39 | 志 [50] | 八犬伝 | 24 | 40 | 10 | 0 | 1 | き [75] | 八犬伝 | |
| | 2 | 18 | 11 | 0 | 0 | し 2 [34] | | 4 | 14 | 7 | 0 | 0 | 起 [25] | | |
| | 58 | 120 | 113 | 0 | 7 | し 1 [298] | 八犬伝 | 0 | 10 | 4 | 0 | 4 | き [18] | 八犬伝 | |
| | 0 | 1 | 2 | 2 | 26 | 志 [30] | | 25 | 66 | 7 | 0 | 0 | 起 [108] | | |
| | 17 | 31 | 7 | 0 | 0 | し 2 [23] | | 付属語 | 語末 | 語中 | 準語頭 | 語頭 | | | |
| | | 語末 | 語中 | 準語頭 | 語頭 | | | 11 | 57 | 2 | 0 | 0 | く 1 [68] | 月水音縁 | |
| | | 66 | 13 | 5 | 22 | 春 [106] | 0 | 0 | 4 | 0 | 5 | く 2 [9] | | | |
| | | 35 | 0 | 0 | 0 | 須 1 [35] | 月水音縁 | 15 | 105 | 24 | 0 | 0 | く 1 [144] | 弓張月 | |
| | | 2 | 0 | 0 | 0 | 須 2 [2] | 0 | 0 | 5 | 3 | 3 | く 2 [11] | | | |
| | | 105 | 25 | 2 | 16 | 春 [149] | 弓張月 | 12 | 52 | 23 | 0 | 0 | く 1 [87] | 八犬伝 | |
| | | 13 | 2 | 0 | 0 | 須 1 [15] | | 0 | 0 | 3 | 0 | 1 | く 2 [4] | | |
| | | 2 | 3 | 0 | 4 | す [9] | 八犬伝 | | | | | | | | |
| | | 91 | 30 | 0 | 20 | 春 [128] | | | | | | | | | |
| | | 43 | 1 | 0 | 0 | 須 1 [44] | 八犬伝 | | | | | | | | |

| 付属語 | 助詞と | 語末 | 語中 | 準語頭 | 語頭 | | | 付属語 | 語末 | 語中 | 準語頭 | 語頭 | | | |
|-----|-------------|----|----|-----|------------------------|--------------------------|------|-----|------|-----|-----|------------------|------------------------------------|------|-----------------|
| 16 | 106 | 5 | 20 | 0 | 9 | と ¹ [157] | 月水奇縁 | 10 | 7 | 28 | 0 | 3 | 多 ⁴⁶ た ⁴⁶ | 月水奇縁 | |
| 20 | 21 | 0 | 8 | 3 | と ² [79] | 24 | | 0 | 1 | 1 | 20 | 堂 ¹⁸ | | | |
| 0 | 6 | 0 | 1 | 0 | 0 | 登 ⁷ | | 4 | 0 | 12 | 1 | 1 | | | |
| 62 | 164 | 32 | 30 | 4 | 8 | と ¹ [300] | 弓張月 | 57 | 13 | 42 | 8 | 12 | 多 ¹³³ た ¹ | 弓張月 | |
| 9 | 9 | 0 | 3 | 5 | 29 | と ³ [55] | | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | | | |
| 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 登 ¹ | | 81 | 11 | 20 | 4 | 1 | 多 ¹¹⁷ た ⁶ | | |
| 89 | 140 | 31 | 21 | 9 | 28 | と ¹ [318] | 八犬伝 | 3 | 0 | 0 | 1 | 2 | | 八犬伝 | |
| 2 | 5 | 1 | 2 | 3 | 10 | と ³ [23] | | 付属語 | 助動詞つ | 語末 | 語中 | 準語頭 | 語頭 | | |
| 付属語 | 助詞 (終助詞) | 語末 | 語中 | 準語頭 | 語頭 | | | 1 | 1 | 0 | 11 | 4 | 3 | | つ ²⁰ |
| 69 | 2 | 2 | 23 | 8 | 32 | 奈 ¹ [134] | 1 | 0 | 4 | 14 | 0 | 0 | 川 ¹ [19] | | |
| 11 | 0 | 0 | 2 | 0 | 6 | な ²¹ | 0 | 0 | 1 | 2 | 0 | 0 | 川 ² [3] | | |
| 0 | 0 | 0 | 3 | 0 | 0 | 那 ³ | 0 | 0 | 0 | 2 | 4 | 3 | 徒 ⁹ | 弓張月 | |
| 10 | 0 | 0 | 6 | 1 | 4 | 奈 ¹ [21] | 12 | 8 | 8 | 14 | 10 | 25 | つ ⁷⁷ | | |
| 49 | 0 | 2 | 11 | 2 | 19 | な ⁸³ | 0 | 0 | 1 | 2 | 0 | 0 | 川 ¹ [3] | | |
| 38 | 0 | 7 | 23 | 6 | 26 | 奈 ¹⁰ [101] | 0 | 2 | 1 | 3 | 0 | 0 | 川 ² [6] | 八犬伝 | |
| 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 奈 ² [52] | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 | 5 | 徒 ⁷ | | |
| 145 | 0 | 7 | 37 | 3 | 17 | 奈 ¹ [209] | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 津 ¹ | | |
| 6 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | な ⁷ | 9 | 1 | 1 | 11 | 6 | 7 | つ ³⁵ | 八犬伝 | |
| 付属語 | 助詞 (に) | 語末 | 語中 | 準語頭 | 語頭 | | 5 | 5 | 7 | 12 | 0 | 0 | 川 ¹ [29] | | |
| 1 | 36 | 3 | 1 | 0 | 0 | 尔 ¹ [39] | 付属語 | 語末 | 語中 | 準語頭 | 語頭 | | | | 月水奇縁 |
| 41 | 213 | 19 | 0 | 0 | 1 | 尔 ² [274] | 13 | 65 | 5 | 0 | 1 | て ¹¹⁵ | | | |
| 1 | 13 | 2 | 0 | 0 | 0 | に ¹⁶ | 16 | 139 | 0 | 0 | 0 | 天 ¹⁷⁷ | | | |
| 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 耳 ¹ [1] | 3 | 2 | 0 | 0 | 0 | 亭 ⁵ | 弓張月 | | |
| 0 | 2 | 1 | 0 | 0 | 0 | 耳 ² [3] | 9 | 45 | 4 | 1 | 1 | て ⁶⁰ | | | |
| 8 | 270 | 36 | 0 | 1 | 0 | 尔 ¹ [315] | 39 | 310 | 0 | 0 | 0 | 天 ³⁵⁰ | | | |
| 42 | 43 | 8 | 1 | 0 | 0 | 尔 ² [94] | 8 | 78 | 2 | 0 | 0 | 0 | て ⁸⁸ | 八犬伝 | |
| 26 | 24 | 10 | 1 | 0 | 0 | 丹 ⁶¹ | 38 | 250 | 0 | 0 | 0 | 天 ²⁸⁸ | | | |
| 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | に ¹ | | | | | | | | | |
| 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 耳 ¹ [1] | | | | | | | | | |
| 0 | 261 | 40 | 0 | 0 | 0 | 尔 ¹ [301] | | | | | | | | 八犬伝 | |
| 51 | 144 | 28 | 3 | 0 | 0 | 尔 ² [226] | | | | | | | | | |

表 2-2 三作品に共通した複数の字体の使い分け ([] 内にその字体の総数、助詞はその字体一文字のみで文中に表れるもの)

| | | 語末 | 語中 | 準語頭 | 語頭 | | | 付属語 | 助詞ね | 語末 | 語中 | 準語頭 | 語頭 | | |
|--|--|----|----|-----|----|----------------|------|-----|-------------|-----|----|-----|----|----------------|------|
| | | 47 | 4 | 0 | 8 | ふ [60] | 月水音縁 | 0 | 3 | 1 | 0 | 1 | 2 | ね [7] | 月水音縁 |
| | | 0 | 0 | 0 | 4 | 婦 [4] | | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 年 [1] | |
| | | 77 | 7 | 0 | 19 | ふ [103] | 弓張月 | 0 | 4 | 1 | 0 | 0 | 1 | ね [6] | 弓張月 |
| | | 0 | 0 | 0 | 3 | 婦 [3] | | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 年 [1] | |
| | | 64 | 4 | 0 | 9 | ふ [77] | 八犬伝 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | ね [2] | 八犬伝 |
| | | 0 | 0 | 0 | 1 | 婦 [1] | | 0 | 2 | 0 | 4 | 0 | 0 | 年 [6] | |
| | | | | | | | | 0 | 5 | 0 | 0 | 0 | 0 | 祢 [5] | |
| | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 2 | 1 | 0 | 0 | 本 [3] | 月水音縁 | 付属語 | 助詞の | 語末 | 語中 | 準語頭 | 語頭 | | |
| | | 9 | 4 | 1 | 2 | 保 [16] | | 2 | 164 | 95 | 20 | 0 | 9 | の [287] | |
| | | 0 | 5 | 0 | 1 | 本 [6] | 弓張月 | 0 | 47 | 6 | 1 | 0 | 0 | 能 1 [54] | 月水音縁 |
| | | 14 | 18 | 0 | 0 | 保 [32] | | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 能 2 [1] | |
| | | 0 | 0 | 0 | 5 | ほ [5] | | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 乃 [1] | |
| | | 2 | 4 | 1 | 1 | 本 [8] | 八犬伝 | 2 | 347 | 143 | 11 | 0 | 2 | の [505] | 弓張月 |
| | | 5 | 7 | 0 | 0 | 保 [12] | | 0 | 12 | 2 | 0 | 0 | 0 | 能 1 [14] | |
| | | 0 | 2 | 0 | 2 | ほ [4] | | 14 | 229 | 109 | 6 | 1 | 1 | の [362] | 八犬伝 |
| | | | | | | | | 0 | 0 | 3 | 0 | 0 | 0 | 能 1 [4] | |
| | | | | | | | | 0 | 11 | 0 | 0 | 0 | 0 | 乃 [11] | |
| | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 2 | 2 | 13 | 0 | ま [31] | 月水音縁 | 付属語 | 助詞 (は・ば) | 語末 | 語中 | 準語頭 | 語頭 | | |
| | | 0 | 0 | 5 | 0 | 末 [8] | | 2 | 125 | 1 | 34 | 0 | 1 | 八 [167] | 月水音縁 |
| | | 0 | 1 | 0 | 0 | 満 1 [1] | | 2 | 0 | 0 | 6 | 0 | 28 | 者 [36] | |
| | | 0 | 0 | 8 | 0 | 満 2 [11] | 弓張月 | 8 | 8 | 0 | 0 | 0 | 0 | 盤 1 [16] | 月水音縁 |
| | | 0 | 0 | 2 | 0 | ま [2] | | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 盤 2 [1] | |
| | | 16 | 0 | 20 | 0 | 末 [74] | | 29 | 243 | 10 | 64 | 0 | 0 | 八 [347] | 弓張月 |
| | | 0 | 0 | 4 | 0 | 満 2 [4] | 八犬伝 | 4 | 4 | 0 | 12 | 6 | 13 | 者 [35] | 月水音縁 |
| | | 1 | 1 | 2 | 1 | ま [6] | | 0 | 13 | 0 | 0 | 0 | 0 | 盤 1 [13] | |
| | | 12 | 0 | 17 | 3 | 末 [59] | | 35 | 265 | 21 | 36 | 0 | 0 | 八 [357] | 八犬伝 |
| | | 0 | 1 | 0 | 0 | 満 1 [1] | | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 26 | 者 [28] | |
| | | 0 | 0 | 1 | 0 | 満 2 [1] | | 7 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 盤 1 [8] | |
| | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 5 | 2 | 3 | 0 | め [9] | 月水音縁 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | は [1] | |
| | | 6 | 4 | 10 | 0 | 免 2 [20] | | | | | | | | | |
| | | 4 | 14 | 4 | 0 | め [24] | 弓張月 | | | 22 | 8 | 0 | 0 | ひ [32] | 月水音縁 |
| | | 0 | 0 | 1 | 0 | 免 1 [1] | | | | 14 | 0 | 0 | 11 | 飛 [25] | |
| | | 1 | 24 | 3 | 1 | め [30] | 八犬伝 | | | 94 | 37 | 0 | 0 | ひ [131] | 弓張月 |
| | | 1 | 0 | 0 | 0 | 免 1 [1] | | | | 0 | 0 | 0 | 5 | 飛 [5] | |
| | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | 48 | 27 | 0 | 3 | ひ [78] | 八犬伝 |
| | | | | | | | | | | 0 | 0 | 1 | 2 | 飛 [3] | |

| | 付属語 | 語末 | 語中 | 準語頭 | 語頭 | | | 付属語 | 助詞も | 語末 | 語中 | 準語頭 | 語頭 | | | |
|-----|-----|-----|----|-----|----|-------------|------|-----|-----|----|-----|-----|----|-------------|------------|------------|
| | 70 | 57 | 45 | 0 | 0 | り [163] | 月水音縁 | 0 | 1 | 0 | 14 | 2 | 38 | 毛1 [55] | 月水音縁 | |
| | 6 | 19 | 5 | 0 | 0 | 里 [30] | | 20 | 27 | 4 | 0 | 0 | 0 | 毛2 [50] | | |
| | 83 | 164 | 64 | 0 | 0 | り [312] | 弓張月 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 | 毛4 [3] | 弓張月 | |
| | 0 | 14 | 5 | 0 | 0 | 里 [19] | | 0 | 4 | 0 | 2 | 4 | 62 | 毛1 [71] | | |
| | 137 | 122 | 43 | 0 | 0 | り [302] | 八夫伝 | 62 | 77 | 18 | 4 | 0 | 2 | も [163] | 八夫伝 | |
| | 2 | 0 | 3 | 0 | 0 | 里 [5] | | 3 | 18 | 2 | 0 | 0 | 0 | 毛2 [23] | | |
| | 付属語 | 語末 | 語中 | 準語頭 | 語頭 | | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 | 毛4 [3] | | |
| | 6 | 32 | 0 | 0 | 0 | る1 [38] | 月水音縁 | 3 | 0 | 0 | 5 | 1 | 63 | 毛1 [72] | 八夫伝 | |
| | 14 | 55 | 2 | 0 | 0 | る2 [7] | | | 56 | 80 | 14 | 1 | 0 | 0 | | 毛3 [15] |
| | 7 | 7 | 0 | 0 | 0 | 類 [14] | | 0 | 3 | 0 | 0 | 0 | 0 | 毛4 [3] | | |
| | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 累 [2] | | 付属語 | 助詞や | 語末 | 語中 | 準語頭 | 語頭 | | | |
| | 19 | 39 | 0 | 0 | 0 | る1 [58] | 弓張月 | 2 | 4 | 1 | 1 | 0 | 1 | や [7] | 月水音縁 | |
| | 49 | 107 | 4 | 0 | 0 | る2 [168] | | | 0 | 0 | 0 | 12 | 0 | 5 | | 也 [18] |
| | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 累 [2] | | 11 | 6 | 0 | 1 | 1 | 3 | や [22] | 弓張月 | |
| | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 類 [1] | | 0 | 0 | 0 | 17 | 0 | 17 | 也 [34] | | |
| | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 流1 [2] | | 1 | 28 | 3 | 3 | 0 | 1 | や [36] | 八夫伝 | |
| | 5 | 47 | 6 | 0 | 0 | る1 [58] | | 0 | 0 | 0 | 13 | 0 | 9 | 也 [22] | | |
| | 80 | 69 | 12 | 0 | 0 | る2 [168] | 八夫伝 | | | 語末 | 語中 | 準語頭 | 語頭 | | | |
| | 4 | 2 | 0 | 0 | 0 | 類 [2] | | | | | 0 | 0 | 1 | 0 | ゆ [1] | 月水音縁 |
| | 0 | 8 | 0 | 0 | 0 | 流1 [12] | | | | 1 | 0 | 1 | 6 | 由1 [7] | 弓張月 | |
| | 0 | 3 | 0 | 0 | 0 | 流2 [3] | | | | 0 | 0 | 0 | 3 | 由2 [4] | | 八夫伝 |
| | 付属語 | 語末 | 語中 | 準語頭 | 語頭 | | | | | 0 | 0 | 0 | 3 | ゆ [3] | 弓張月 | |
| | 7 | 39 | 15 | 0 | 0 | れ [61] | 月水音縁 | | | 0 | 1 | 1 | 0 | 由1 [2] | | 八夫伝 |
| | 5 | 43 | 29 | 0 | 0 | 連 [77] | | | | 1 | 0 | 1 | 0 | 由2 [1] | 八夫伝 | |
| | 19 | 56 | 74 | 0 | 0 | れ [149] | 弓張月 | | | 0 | 0 | 3 | 4 | ゆ [7] | | 八夫伝 |
| | 6 | 17 | 25 | 0 | 0 | 連 [48] | | | | 0 | 1 | 0 | 3 | 由1 [4] | 月水音縁 | |
| | 15 | 57 | 43 | 0 | 0 | れ [115] | 八夫伝 | 付属語 | 語末 | 語中 | 準語頭 | 語頭 | | | | |
| | 40 | 32 | 37 | 0 | 0 | 連 [109] | | | 2 | 0 | 5 | 0 | 0 | ら1 [7] | 月水音縁 | |
| 付属語 | 助詞 | 語末 | 語中 | 準語頭 | 語頭 | | | | 19 | 21 | 69 | 0 | 0 | ら2 [109] | | 弓張月 |
| 0 | 326 | 0 | 0 | 0 | 5 | を [331] | 月水音縁 | | | 0 | 0 | 15 | 0 | 0 | ら1 [15] | |
| 0 | 4 | 0 | 0 | 0 | 0 | 越 [4] | | | 11 | 14 | 106 | 0 | 0 | ら3 [131] | 八夫伝 | |
| 12 | 321 | 0 | 2 | 0 | 5 | を [340] | 弓張月 | | | 0 | 3 | 12 | 0 | 0 | | ら1 [15] |
| 0 | 7 | 0 | 0 | 0 | 0 | 越 [7] | | | 30 | 12 | 103 | 0 | 0 | ら3 [145] | 八夫伝 | |
| 2 | 245 | 0 | 3 | 0 | 5 | を [255] | 八夫伝 | | | | | | | | | |
| 0 | 90 | 0 | 0 | 0 | 0 | 越 [90] | | | | | | | | | | |

表3 〈ケ〉 助動詞

| | | | | | | | | |
|-----|-----|----|----|----|----|----|---|-----|
| べけれ | なけれ | けめ | けん | けれ | ける | けり | 介 | 月水 |
| | | | | | | | け | |
| 0 | 0 | 0 | 1 | 8 | 2 | 1 | 介 | 弓張月 |
| 0 | 0 | 1 | 2 | 1 | 4 | 3 | け | |
| 1 | 4 | 0 | 5 | 8 | 19 | 2 | 介 | 八犬伝 |
| 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 | け | |
| 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 | 1 | 希 | |
| 4 | 7 | 0 | 3 | 2 | 1 | 9 | 介 | |
| 0 | 1 | 0 | 6 | 7 | 6 | 8 | け | |

くらし」3、語中「おくり」2「さしぐみて」「問かくる」等、八犬伝に語頭「ぐさと」、語中「まくらに」「めぐらし」「ゆくりなく」と語頭のほか語幹に〈ケ〉を含む語に用いられる。

〈ケ〉は三作品とも【介】が少なめであり、【け】は月水に語中末、弓張月・八犬伝では位置に関係なく使用される傾向がある。これらで、【介】の字体は慣習的に助動詞「けり」「けん」や形容詞活用語尾に使われることが指摘されている。今回の調査でも「けり」「けん」が【介】で書かれていたが、表3にまとめた通り【介】【け】の両方に用例がある。弓張月は確かに【介】が使用されることが多いものの、月水と八犬伝はほぼ同等に【け】が使われる。また、先行研究で「けふ」の語は

【介】が定着していると報告されているが、月水には「けふ」を平仮名で書く例はなく、弓張月に「けふ」／【介】3【け】2、八犬伝では5例すべて【け】である。三作品を通じて自立語には【け】が用いられることが多く、【け】の使用領域は広く、【介】は限られた位置に使用されてい

た。

〈コ〉の【古】は草双紙に滅多に使用されないが、恋川春町の黄表紙では語頭に使用されている。⁽³⁾読本三作品には汎用の【こ】を中心に、語頭・準語頭に【古】が使われていた。【古】の使用量は八犬伝23、月水17、弓張月2と弓張月は他の二作に比して僅かである。用例は「これ」「ことく」、それぞれ行末近くに位置する。

十五丁ウ(L2)【古】とく一
廿四丁オ(L3)【古】れ一

合字の「こと」や【こ】より大きめの字体なので、行末近くのスペースをうまく語の調節をして埋め、中途半端な語の切れ目ができないようにする用途で使われたかと考えられる。

月水の【古】の用例は、語頭「これ」11「こ、」「こひねがはくは」「こなた」「ことぐ」「こみく」、準語頭「跳こえ」と、頻用される「これ」(【こ】26例)の語に【古】が時折混ぜられ、その他の自立語にしばしば使用される。八犬伝は語頭「こ、」14「こ、ろ」4「こなた」4「こよなき」1と、〈コ〉から「、」に続く語「こ、」「こ、ろ」に【古】が目立ち、「こ、」「こ、」／【こ】1、「こ、ろ」／【こ】7、決まった語に用いられている印象である。【古】は確かに語頭に使われる字体であるが、使用するシチュエーションが本によって異なる。

〈シ〉は非語頭【し一】に対し、【志】が語頭という使い分けが読本三作品においても共通していた。【志】の用例のみ次に挙げる。

【志】

月水

語頭—しのび 4 しかれども 3 して 3 しかる 2 しかは

2 しらず 2 等

準語頭—久しくして 飽あかして 饗しむ 畜しめ

語中—餌飼して 假寝したまふ つ、しみて 決断して

音しけれ 銷鏢して等

弓張月

語頭—しほし 9 し 7 しはく 5 しかるに 4 しかる

(知) 3 等

準語頭—引しほり 2 正しくして まつしら (真白)

八犬伝

語頭—したり 3 しかず 2 しかれども 2 しらず 2 さら

ぬ しかりし等

準語頭—思ひしらせん 聞しらずや

語中末—青して 帰降して 賞し

語頭を中心に「餌飼して」「賞し」といった語中末に僅かにみられる。「俱して」「為し」といった動詞連用形や複合動詞の語、「漢字＋して」「漢字＋し」には「し」が中心に用いられるが、漢字が合わさると「志」を使っても差し支えないようである。

〈ツ〉は【つ】が位置に関係なく使われ、【川】が語中末に偏っている。【川】は三作品に共通してみられるもの、弓張月は僅か 3 例と少なく、用例を挙げると「まつしら (真白)」「もつはら

(専)「まづ」と促音と語末である。月水は「おのづから」5「いづち」「いづく」、助詞「つ、」等の語と、「とつてかへし」「もつはら」「もつはら」は【つ】1(あり)と促音の例がある。八犬伝の【川】は語中末に偏っており、用例は「なつ草」「しづか」「ひとつとして」他、「あつて」「とつて」2「とつて返し」「のほしか、つて」と他の二作品と同様に促音の【川】が目立つ。【川】が促音表記に用いられるのはしばしば指摘されており、読本にも同様の用法があった。

〈テ〉は三作品とも【て】が汎用、【天】が語末および付属語の「として」「とて」「なりて」などに偏っている。月水の【て】の語頭中の用例は「てらして」「過てり」2「いかでか」2「引たて、」、弓張月は「てらし」「ふりてらし」「過てり」「もてる」「さては」2、八犬伝は「さても」「なでふ」である。【天】は三作品とも使用量が月水17、弓張月350、八犬伝288と【て】の月水115、弓張月60、八犬伝88を上回っているが、文中によく使われる「至りて」「呼びて」「俱して」「見て」等の動詞連用形語尾に【天】が優勢に使われているからである。

〈ト〉は汎用の【と】1に対し、月水に【と2】、弓張月・八犬伝に【と3】が語頭に偏って使われ、【と2】【と3】は同等の関係の字体といえる。使用量は【と1】がいずれの作品においても多い。

助詞「と」「ど」、複合助詞「として」「とて」は大勢が【と1】で書かれ、時折【と2】【と3】が混じる。【と2】【と3】の自立語語頭の用例は「とりて」「とまれかくまれ」「とくく」等で、語頭

の用例数をみると月水は【と1】9【と2】25、弓張月は【と1】8【と3】29と【と2】【と3】が優勢だが、八犬伝は【と1】28【と3】10と【と1】が優勢である。八犬伝は語頭に偏るというより、時折混ぜられる字体という具合である。近世も終わりの頃になると〈ト〉の使い分けが崩れてくると指摘されているが、関連は断定できない。

〈ニ〉の【尔1】【尔2】は弓張月・八犬伝では【尔1】を主に助詞に用い、【尔2】を自立語に用いている。しかし、月水では付属語・自立語の両方に【尔2】が主体的に使用される。助詞「に」は、月水が【尔1】36【尔2】23、弓張月が【尔1】270【尔2】43、八犬伝が【尔1】261【尔2】14と各資料によってメインになる字体、混ぜられる割合が異なる。自立語に【尔2】が用いられるという点は三作品において共通し、月水は「にげなく」、弓張月は「いにしへ」、八犬伝は「いかにして」「いにしへ」とにかく」といった語が【尔2】で書かれる。

〈ネ〉は【ね】が語の位置に関わらずどこにでも使用され、【年】は非語頭に偏ると指摘されており、三作品ともにその傾向がみられた。月水の【年】は「かね(兼)」、【ね】は「ねがはく」「ねがふ」「こひねがはく」と助動詞ズ已然形「ね」が4例、弓張月の【年】は「見かね」、【ね】は「ねらひ」「はね(跳)」、助動詞ズ已然形「ね」4例である。八犬伝は【年】に「かねて」^{は、}「測かねて」「回答かねて」「死ぬや」と助動詞ズ已然形「ね」2例である。【ね】は助動詞ズ已然形「ね」2例、【年】【ね】どちらでも助動詞ズ已然形

「ね」に使われるが、【ね】は「あらねば」「認めね」に使われ、【年】は「候はねど」「候はねば」に使われ、【年】が決まった語に使用される。

〈ハ〉の【者】は【臣】の語頭に用いられ、【八】が助詞「は」およびハ行転呼音によって生じる「^ウ臣」に使用されることはよく知られている。また【盤1】は助詞「は」に用いられ、行末に使われることのある字体である。【者】は三作品に共通して「はじめ」「はやく」等の語頭に用いられ、助詞「は」は【八】で書かれることが圧倒的に多く、先行研究と変わらない。月水で唯一【八】を語頭に分類した語は「ばと」という擬音語のみである。【者】【八】の使い分けは読本にもかなりはっきりみられる。【盤1】は助詞に用いられたが、行末にあたるのは月水で5例中1例、弓張月は12例中行頭3例/行末4例、八犬伝は6例中2例と、必ずしも行末に偏るわけではない。月水は複合助詞「には」10例中8例が【盤1】と、決まった複合助詞に使われるのが特徴的である。

〈モ〉の【毛1】は非語頭、三作品には「もの」「もて」「もし」「もつはら」「もるとも」等の語頭、「おもひ」「おもはず」「おもしろき」等の語中に【毛1】が用いられている。下の字体に連綿するのに適した形のためかと考えられる。最終画で上に向けて筆が運ばれる【毛2】【も】【毛3】は「最も」「もつとも」「もろとも」等語末、助詞「も」「ども」「ども」「にも」等の付属語にみられる字体である。月水は【毛2】、弓張月は【も】【毛2】、八犬伝は【毛3】が使用され、三種類の字体は相補的な関係にある。弓張月は語

末中心に用いられる字体に【毛2】【毛1】の二種類があり、【毛1】163【毛2】23で【毛1】が優勢、【毛2】は時折混ぜられる字体である。弓張月には語頭の【毛1】が2例ある。「もて」(二十丁オ)「もし」(廿七丁ウ)の語で、前者は「もて」と【毛1】を行末に残して連綿が途切れており、後者は行末の狭いスペースに【毛1】を【し2】で取り囲む形で取めたものである。

漢字に近い【毛4】も三作品にみられ、月水は「もの」3、弓張月にも「もの」3、八犬伝は助詞「も」3に使われていた。月水で【毛4】の2例は、似たようなフリースが同じ匡郭内に並んでいる十八丁ウにみられる。

十八丁ウ

(L1) ある【毛1】の

(L1) (L2) 形なき【毛1】のなり

(L2) 形なき【毛4】の

ある【毛1】の

(L4) 一至明なる【毛1】のなり。

偽変なる【毛4】のなり。

L1とL4の間に六回「もの」が書かれ、二回【毛1】が使用された後に【毛4】で「もの」を書いているので、単調にならないよう変えているのだと考えられる。弓張月の【毛4】の「もの」は十四丁オ、廿五丁オ、三十丁ウと離れた場所、右のような用法ではない。八犬伝の【毛4】の助詞は3例中2例が行末に近いところにみられるが、使用理由は判然としない。

〈ヤ〉の【也】は【毛1】と同じく下の文字に連綿しやすい字体であるため、「や」、「やうやく」「やがて」といった語頭、「はやく」「こやつ」「あやしみ」といった語中に限られる。【や】は終助詞「や」や「はや」等、文末や語末に用いられるが、語頭にくることもある。三作品に共通していた「やうやく」の語は、月水では「【や】う【也】く」、弓張月では「【也】う【や】く」「【や】う【也】く」、八犬伝では「【也】う【也】く」となっている。上が【や】であっても【也】であってもよいようである。弓張月と八犬伝の「やよ」、弓張月に「や(矢)」には【や】が用いられ、独立した一語では、下の字に積極的に続く【也】より【や】が相応しいのであろう。

ここまでは先行研究で指摘されている用法がみられた仮名だが、【介】【古】【尔2】【盤1】【毛4】は作品によって若干用い方が異なる。【古】【盤1】【毛4】はむしろ機能的用法とは異なる用い方が顕著だったといえよう。「時折混ぜられる」といった傾向の字体も、しばしばみられた。

3—2

次に、先行研究では指摘されていない、読本に特徴的な使い方が見出された字体を検討していく。

〈ス〉の【春】と【須1】は、【春】が汎用の字体、【須1】が語末(助動詞「ず」がつく語を表2では語末に含めた)という使い分けが共通している。弓張月のみ【す】が9例みられるが、【須1】

の方が15とやや使用量の方が多い。黄表紙や合巻といった草双紙は【須1】より【す】が優勢であり、しかも【春】【す】は用法が判然としない。【須1】は草双紙などに当たり前に使われる字体ではないので、読本に【春】【須1】に共通する住み分けがみられたのは興味深い。【須1】の用例を次に挙げる。

【須1】

月氷

語末—あらず5 べからず5 容易たやすからず2 ならず2 し
らず あたはず等

弓張月

語中—ますく2
語末—かならず2 おはします2 しかず たがはず はゞ
からず 給はず等

八犬伝

語中—ますく
語末—ならず4 給はず3 思はず3 用もちひず2 死しす2
異ならず2 出でず等

「ますく」や助動詞「ず」といった語を【春】で書くこともあり、【須1】は語末中心に混ぜられる字体となっている。

〈フ〉は【の】が汎用で、使用量としてもメインの字体といえる。【能1】は月氷54、弓張月14、八犬伝4と量に差がある。月氷の用例をみると、助詞「の」の21例中47例、「おのづから」7例中1例、「もの」20例中6例が【能1】である。主に助詞に混ぜられ、稀に

自立語に【能1】が使われる。【能1】を使って書く「おのづから」は、「おの—づから」と改行で途切れている箇所である。弓張月では助詞「の」12、語末は名詞「もの」37例中1例、副詞「夥おほくの」に【能1】が使われている。弓張月の【能1】の6例は行末近くにみられ、字体を歪ませたり、二本の縦線の間前後の文字を挟ませたりして、スペースを省略する書き方をしている。改行によって語が途切れるのを嫌った技法かと考えられる。八犬伝は「もの」46例中4例に【能1】が使われている。三作品とも【能1】は語末と助詞が使用領域である点は共通している。

〈フ〉の【ふ】【婦】は、【ふ】が汎用の字体、【婦】が語頭に使用されることが読本三作品に共通していた。先行研究では【婦】の用法が一定していない。読本三作品では【婦】はすべて語頭である。

【ふ】【婦】の語頭の用例をみると、この二種類の字体で同じ語を書いていることが分かる。

【婦】

月氷

ふかく2 ふた、び2

弓張月

ふたり ふた、び ふりたる(古)

八犬伝

ふたり

【ふ】

月氷

ふかく3 ふた、び ふか、りし ふかし ふりて ふ

るはして

弓張月

ふかく12 ふた、び5 ふりたる(古) ふりてらし

て

【八犬伝】 ふかく2 ふかくし ふかくして ふかき ふき ふく
く ふらせし等

大抵は【ふ】で語を書き、稀に語頭に【婦】を使用したようである。

〈ホ〉の【本】と【保】は、草双紙などでは【本】が優勢で、

【保】が全く使用されない場合が多い。読本三作品では、【保】の使用量が月水16、弓張月32、八犬伝12、【本】が月水3、弓張月6、八犬伝8と【保】が多めである。なお、弓張月・八犬伝は【ほ】も用いている。【保】【本】の用例を次に挙げる。

【保】

【月水】

語頭―ほど2

準語頭―何ほど

語中―おほし おほかり おほえし もよほし

語末―なほ9

【弓張月】

語中―おほして6 おほし3 おほさん おほえねば おほ

す もよほして他

語末―なほ14

【八犬伝】

語中―おほつかなし おほしき おほし召 おほゆれば な

ほりて ひきしほりて等

語末―なほ5

【本】

【月水】

語中―おほく

語末―なほ2

【弓張月】

語中―おほし とほしからず のほし 引しほり 刺とほし

【八犬伝】

語頭―ほゐ

準語頭―待ほど

語中―おほつかなく おほしくて 立なほし 取なほす

語末―なほ 処得がほ

月水では【保】が位置に関係なく使用され、【本】は語中末にし
か使われない。弓張月は【保】が語中末に偏り、【本】は語頭中
みられる。八犬伝の【保】は語中末、【本】は位置に関係なく使用
される。各資料で使用傾向が異なるが、「おほし」の語、活用形は
三作品を通じてほとんど【保】が使用されている。

月水と弓張月では近くの行に使用される同じ語の字体を【本】と
【保】で変えているものがみられる。

【月水】

十二丁オ

(L4) な【保】

(L6) な【本】

十五丁オ

(L5) な【保】

〔L10〕 な〔本〕

弓張月

引しぼり

十四丁オ

〔L8〕 引し〔本〕り

〔L11〕 引し〔保〕り

刺とほし

廿五丁ウ

〔L9〕〔L10〕 刺さと〔保〕—し刺さと〔本〕し

八犬伝にはこうした用法はないが、使い分けとは異なる用法を
〔保〕〔本〕は含んでいる。

〈マ〉は〔ま〕〔末〕〔満2〕の三種類の字体が共通していた。

〔ま〕〔末〕の二種類は、語頭中を中心に使われるという用法が似て
おり、三作品ではどちらかが主体的に使われ、もう片方は少量混ぜ
られる字体となっている。

〔ま〕

月水

語頭—まづ5 ますく2 まげて まつ まだ ます (増)

まじはり

語中—たちまち3 いまだ2 あやまち いましめ しづま

り とまれかくまれ等

語末—ひま2

付属語—まで2

弓張月

語中—いまだ2

八犬伝

語頭—まよへ(迷)

準語頭—うちまもる

語中—あまり あまる

語末—あながま

付属語—まで

〔末〕

月水

語頭—まゐらす まゐらせし まつはりし

語中—たちまち2 のたまはく のたまふ たまふ

弓張月

語頭—まゐらせ8 まゐらすれ4 まづ4 まつはりて3

ますく2等

語中—いまだ4 あまり あまりて いきまきて とまれか

くまれ 浅あまし等

八犬伝

語頭—まうす7 ますく3 まづ3 まして2 まゐらぎ

る まゐり等

準語頭—かくまで2 身まかり

語中—そがま、4 つかまつらん2 あまり2 いまだい

つのまに おさまり等

付属語—まで10 ませ まじき

月水は【ま】がメインに用いられ、語頭中に【末】がみられる。弓張月はごく少量【ま】が使用され、主に【末】が使われる。八犬伝は【ま】が汎用だが、非語末で【末】が多い。【ま】【末】は「ますく」や「まつ」など同じ語を書いていることもあるので、代替が利き、書き手によって選ぶことのできる字体である。【末】の用例を見ると、「まぬらす」の語が三作品に共通しており、【末】は語に定着している側面もあるようである。

【満2】⁽¹⁸⁾は月水と、弓張月・八犬伝との間に用法の違いがある。

【満2】

月水

語頭—ますく2 まつはる

語中—たちまち5 のたまはく 身まかり とまれかくまれ

弓張月

語中—まします2 ましますば えらます

八犬伝

語中—まします

月水には【満2】の使用量が多めで、語頭に使用される場合も3例ある。「ますく」／【満2】2【末】2、「たちまち」は延べ10のうち【満2】5【ま】4【末】2と様々な字体で変化をつけて書く。また、「とまれかくまれ」は上の〈マ〉は【ま】、下の〈マ〉を【満2】にしており、弓張月・八犬伝にも「まします」「ましますば」「ましますず」の例を語頭が【末】、語中を【満2】にしている。

【満2】は主に変化をつける用途で使われる。

〈リ〉は助動詞「たり」「なり」「けり」や動詞の活用語尾が主であり、三作品とも【り】を主体に、【里】が補助的に用いられていた。【里】は先行研究で共通した用法は見出されていない。使用量は月水30、弓張月19、八犬伝5と月水にやや多めである。月水・弓張月は動詞の語幹を漢字で書いたときの連用形活用語尾（月水「来り」「破り」「至り」等、弓張月「叱り」「帰り」「止り」等）に【里】が使用される。月水の「漢字＋り」は10例中8例に【里】を用いる傾向がみられるが、他の二作品はそれほど使われない。弓張月は「吼か、りて」2「跳か、りて」の3例の「、」に続く形にすべて【里】が用いられる。八犬伝は自立語だと「きり、と」「ばらりずん」「残りて」の3例にのみ【里】が使われ、「残りて」は「残りて」と改行によって途切れる箇所【里】を用い、「きり、と」「ばらりずん」は共に擬音語である。読本三作品の傾向として【里】は使用する箇所を限って、時折混ぜている字体という印象である。

表4 【れ】【連】の分布

| | | | | |
|----|----|---|-----|--|
| われ | これ | | | |
| 17 | 15 | れ | 月水 | |
| 0 | 22 | 連 | 弓張月 | |
| 14 | 28 | れ | 八犬伝 | |
| 1 | 3 | 連 | | |
| 13 | 23 | れ | | |
| 2 | 14 | 連 | | |

表5 漢字の直後〈レ〉

| | | |
|--------|--------|-----|
| 漢字＋【連】 | 漢字＋【れ】 | |
| 22 | 3 | 月水 |
| 23 | 16 | 弓張月 |
| 32 | 31 | 八犬伝 |

〈レ〉は草双紙などでは【れ】のみで書くか、【連】は使用されても1〜2例と僅かである。読本三作品には必ず【連】が使用されていただけでなく、月水【れ】61【連】77、弓張月【れ】149【連】48、八犬伝【れ】115【連】109と使用割合にはバラつきがあるが、いずれの読本にもよく見られる字体だった。使用箇所は語中末に限られ、「みだれて」「見れば」といった動詞の活用語尾や、「これ」「われ」など名詞の語末である。類出語である「これ」「われ」をみてみたい。表4を参照すると、月水と八犬伝は「これ」を【れ】【連】を混ぜて書いているのが分かる。「われ」は【連】が混ざっても1〜2例という傾向が三作品に通じる。また、表5に、漢字直後の送り仮名の「漢字＋【れ】」「漢字＋【連】」の数量を示した。いずれも【連】が優勢である。【連】は使う箇所によってかなり意識的に使っているとみられる。

草双紙などにそれほど使用量が多くなく、決まった用法を見出しづらい字体が、三作品の読本に共通する使用傾向がみられたり、個別に読本の特徴的な用法となっていたりする。草双紙などは字体の種類総数が少なめであるだけでなく、用法上においてもより統一されており、読本の平仮名字体の用法には種類を限って自由さがあることが分かる。

3—3

一作品に特徴的な用法がみられたものは次の仮名である。

〈イ〉は【い】が主に使われ、【以】は弓張月が2、八犬伝が4と

使用量が二桁にも満たないが、月水のみ20と多めである。弓張月と八犬伝の【以】の用例は、弓張月「いかなる」「かい繕つくろひ」、八犬伝「いづれ」「いかに」「いたう」「かい繰くりり」となっている。月水の用例には「かいつかみ」があり、接頭辞「かい」に【以】が用いられるのは三作品で共通していた。月水の他の用例は「いへども」4「いたづらに」2「いたりて」2「いたり」「いたれば」「いたる」「いたゞき」など〈イ〉の次に〈タ〉【堂】【多一】の字体に続く語頭を占めている。また「いひ」／【い】9【以】1、「いへらく」／【い】6【以】1、「いへども」／【い】8【以】4といった、文中に頻繁に用いられる語に【以】を混ぜる。

〈タ〉の【多一】【た】は、【た】が語頭、【多一】が汎用の字体という傾向がある。【た】の使用量をみると弓張月は1例〈た、かひ〉、八犬伝は6〈たる〉2〈たり〉「たち」「たもつ」「をりたちて」で、他の多くの語は【多一】によって書かれる。月水は【た】46と使用量が飛び抜けている。月水の「た」の用例は、助動詞「たり」23例中16例、「たる」10例中6例、「たれ」1「たまへ」1、自立語語頭「たちまち」11「たのします」「たちぬ」等、準語頭「引たて」、語中「みだれて」といった語である。月水のみ【堂】の字体もみられ、語頭にのみ少量の使用がみられた弓張月・八犬伝に比べて、〈タ〉の字体を様々に使い書くのが特徴的といえよう。

〈ヒ〉の【ひ】【飛】は、弓張月・八犬伝に共通する用法がみられるものの、月水の【飛】が特徴的な用法で用いられている。【ひ】は月水・弓張月で語中末、八犬伝に汎用の字体となっており、また

動詞の送り仮名「いひ」「思ひ」「給ひ」等に使われる。【飛】の用例を次に挙げる。

【飛】

月水

語頭―ひとり5 ひとしく ひきて ひらき ひま ひらきて ひろく

語末―よろこび4 しのみび2 ふた、び 一たび こひ(請)うしなひ おもひ等

弓張月

語頭―ひとり3 ひろく ひとと

八犬伝

語頭―ひらけば ひとつとして
準語頭―推おしひらきて

弓張月は語頭が【飛】を占め、語中末が【ひ】と住み分けがなされている。八犬伝では語頭に【飛】が混ざっている形である。月水では【飛】が語頭を占めているだけならず、語末においても使用されている。「よろこび」／【ひ】2【飛】4、「ふた、び」／【ひ】2【飛】1、「うしなひ」／【ひ】1【飛】1、「思ひ」／【ひ】1【飛】1と同じ語に【飛】【ひ】両方の字体を用いる。語の明示のために語頭に使うというより、装飾性重視に使用される印象である。

〈メ〉は【免1】と、若干漢字に近い【免2】があり、月水は【め】【免2】、弓張月・八犬伝は【め】【免1】を用いている。用法は月水にのみ大きな特徴がある。弓張月・八犬伝とともに【め】の

使用量が多く、【免1】の使用量が1のみで、弓張月は「睨にらつめて」、八犬伝は助動詞「め」に用いられている。その用法に共通性は見いだせない。月水では【め】9、【免2】20と使用量が上回る。

月水

【め】

語中―す、める す、めて 飽あかしめて

語末―いましめ 鎮しずめ

助動詞―なめり2 め2 しめ

【免2】

語中―もとめ2 はじめ す、め

語末―はじめ2 ながめて2 やめて

助動詞―なめり2 しめ2 め けめ

用例をみると、どちらの字体も語中末、助動詞に用いられる。助動詞「なめり」「しめ」「め」は字体の組み合わせでバリエーションを増やしていると考えられるが、「す、める」「す、めて」「はじめ」「はじめて」はほぼ決まった字体で書かれている。全体的に【め】で書く語と【免2】で書く語を分けて、ちりばめている印象である。〈ヲ〉の【を】は主に助動詞「を」を書くほか、自立語に使われる。自立語の用例を挙げると、月水「をろ」「をしへて」「をはりて」「朽くをし」等、弓張月「をはり」2「をりく」「朽くをしさ」「やをら」「やをれ」等、八犬伝「をさくく」2「をり」「やをら」2「やをれ」等である。【越】は助動詞「を」にのみ使われる。この【を】は【越】の住み分けは読本三作品に共通する。ところが、【越】の使用

量をみると、月水4、弓張月7、八犬伝90と八犬伝が突出している。月水・弓張月は稀にみられるという印象だが、八犬伝は満遍なく文中にみられる。

最後に特にはっきりした特徴がみられなかった仮名を挙げる。

〔ナ〕は〔奈1〕〔な〕の二種類が三作品で共通していた。月水・八犬伝は〔奈1〕をメインに使用し〔な〕は少量、弓張月は〔な〕が〔奈1〕を上回って使用され、〔奈1〕〔な〕以上に〔奈1〕に近いが一画多い〔奈2〕が使われる。〔ナ〕の語に多いのは助動詞「なり」「なし」、形容詞「なし」で、月水・八犬伝はそうした語を書く際に〔奈1〕〔な〕を混ぜて書く。弓張月は〔奈2〕がメイン、〔奈1〕が混ぜられ、〔な〕は位置や語に関係なく用いられているのが特徴的である。

〔ユ〕の仮名は三作品に〔ゆ〕〔由1〕の二種類が共通した。用例を挙げると、〔ゆ〕は月水に準語頭「引ゆく」、弓張月に語頭「ゆく」3、八犬伝に語頭「ゆく」2「ゆきく」で「ゆきとく」、準語頭「落てゆく」2「牽てゆく」と語頭・準語頭が中心である。〔由1〕は月水に語頭「ゆづり」「ゆゑに」「ゆるし」など、準語頭「將ゆく」、語末「聞ゆ」、弓張月に準語頭「伴いゆく」、語中「見ゆる」、八犬伝に語頭「ゆく」2「ゆくりなく」、語中「おぼゆれ」と語中末にもみられる。汎用の〔由1〕、語頭に偏る〔ゆ〕という見方ができるが、使用量が少ないのではありません。

〔ラ〕は現行仮名字体に近い〔ら1〕と「ゝ」の形に近い〔ら2〕、「ゝ」に一点加えたような〔ら3〕が、三作品でみられる。月水は

〔ら1〕〔ら2〕、弓張月・八犬伝には〔ら1〕〔ら3〕の二種類がそれぞれ使われ、〔ら2〕〔ら3〕は〔ら1〕より使用量が多く、役割としても同等といえる。〔ラ〕は「あらず」「いへらく」「奉らん」といった動詞未然形活用語尾や、助動詞「らる」「べからず」「ざら」等に限られ、多くは〔ら2〕〔ら3〕で書かれる。〔ら1〕は月水7、弓張月15、八犬伝15となっており、助動詞「らる」や「悞らず」「易からん」といった動詞活用形語尾などに時折混ぜられる字体である。使用領域は〔ら2〕〔ら3〕と同等で、〔ら1〕に限られた用法はない。

〔ル〕は現行仮名字体に近い〔る1〕と、上の字から連綿出来る形の〔る2〕、〔類〕が三作品にみられる。〔ル〕の語は動詞終止形が大勢である。月水には動詞終止形の字種の違いと「ゝ」との組み合わせに〔る1〕〔る2〕の傾向がみえる。「畏る」「被る」「飾る」など「漢字＋る」の形になっているものはほとんど〔る1〕が用いられ、平仮名で書かれる「する」全10例や、「ある」13例中10例は〔る2〕である。「涙入るゝ」「生るゝ」「逃るゝ」と「漢字＋るゝ」と踊り字が続く場合は、〔る2〕

表6 漢字の直後〈ル〉

| 漢字＋〔る1〕 | 漢字＋〔る2〕 | |
|---------|---------|-----|
| 21 | 2 | 月水 |
| 22 | 17 | 弓張月 |
| 39 | 18 | 八犬伝 |

を用いて漢字から一続きになっている。但し弓張月の「漢字＋る」は表6に示したように〔る1〕〔る2〕がほとんど同等に用いられる。「敗るゝ」など「漢字＋るゝ」は6例すべて〔る1〕で月

水とは異なる。八犬伝の「漢字＋る」は【る1】がやや多い。「漢字＋る、」は【る1】4【る2】5とさほど字体の使用量が変わらない。個人的な筆の流れや書きやすさによって、【る1】【る2】の使用傾向が分かれると考えられる。【類】は草双紙などに減多に使用されない字体で、月水14、弓張月1、八犬伝2と、月水はやや多めである。弓張月は「いかなる」、八犬伝は「ある」「得る」に用いられ、いずれも行末、行末に近い箇所に使われている。【る2】で書くとスペースが余ってしまうときに、やや大きめで複雑な字体で埋めたと考えられる。月水は助動詞「らる」2【る】「たる」4、自立語語末「ある」3「あづかる」「しる(知)」「まつはる」「うくる」に【類】が用いられる。助動詞「らる」「る」が書かれるのは【類】でのみ。しかし行末に使用される例などはない。語を書くバリエーションとして用いられる面が強いと考えられる。

4

読本は自立語のほとんどを漢字で書くが、平仮名で書かれる「かゝる」や「しばし」「しかるに」といった副詞、連体詞、接続詞、また名詞や動詞に【か】や【志】といった特定の位置に用られる字体を使う点は変わらなかった。また、非語頭の【起】や【天】は動詞の送り仮名に使われ、使用量が多くなる場合がみられた。一方、自立語を書く機会の減る(二)の【尔1】【尔2】等は、助詞【に】に使うメインの字体が本によって異なるということが起こり、これも漢字仮名交じり文の影響と考えられる。

表記のバリエーションを増やす志向は強く、全体として、草双紙にはあまり見られない字体をよく使っている。【保】は草双紙でよく使われる【本】より多く使用され、【連】も使用量が多めであった。読本三作品に通じてみられたのは類出語の字体を変える用法である。特に【古】は月水の「これ」、八犬伝の「こ、」に混ぜられるのが顕著だった。改行を嫌った用法もみられ、月水には「おのーづから」と語が切れてしまう箇所にわざと【能1】を用いる場合があったり、大きな字を使ってスペースを埋める、字体を歪めさせてスペースを省略したりする技法的な用い方が弓張月にはみられた。匡郭があり、行数の決まっている読本は、語の切れ目を注意喚起するか、あるいは回避する配慮を要したかと考えられる。行数の決まっている本ならではといえる。今回は各作品にしかみられない字体は割愛したが、三作品に共通する字体を検討したのに関わらず、既に示した通り作品によっては特徴的な字体の用法がみられたことは興味深いといえよう。

草双紙は平仮名主体、読本は漢字主体の文章だが、草双紙より読本の平仮名字体は多様であり、平仮名にも教養色が強い表記と考えられる。しかし、各作品にのみみられた字体を除外したので、充分にそれぞれの読本を検討したとはいえない。加えて、より広い範囲の読本の字体の種類を比較対照しなければ、今回の調査をジャンルとしての特徴とするには早計といえる。江戸時代の平仮名字体の特徴が明らかにする地道な調査研究が今後も求められる。

- 注1 浜田啓介(一九七九) p2⁴
- 2 草双紙類は一七七二～一八三四年の出版物、読本類は一八〇五～一八三〇年の間の出版物である。
- 3 曲亭馬琴『近世物之本江戸作者部類』(徳田武校注、岩波書店、二〇一四年) P142
- 4 式亭三馬『昔唄花街始』(天保十五年刊)の跋文を参照した。(早稲田大学図書館所蔵、古典籍総合データベース、http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenshok/html/he13/he13_01883/index.html (二〇一四年十一月十六日参照))
- 5 『^小月水奇縁』は『馬琴中編読本集成 第一巻』(鈴木重三・徳田武編、汲古書院、一九九六年)、『椿説弓張月前篇』は『影印椿説弓張月前篇』(坂坂則子編集、笠間書院、一九九六年)、『南総里見八犬伝筆鞆』は国立国会図書館所蔵本(国立国会図書館デジタルコレクション)、<http://dl.ndl.go.jp/infondidjp/bid/2546338?noOpened=1> (二〇一四年十一月十六日参照)を資料とした。
- 6 以降、便宜的に資料の名称を月水、弓張月、八犬伝と省略する。
- 7 恋川春町『無益委記』87(久保田(一九九六))、『金銀先生再寝夢』94(久保田(一九九八))、十返舎一九『心学時計草』85『新鑄小判騷』83、『奇妙頂礼胎動杖』89、『怪談筆始』84、『化物小遣帳』78(以上六作品矢野(一九九〇))、芝全交『大悲千祿本』73(久保田(二〇〇二))と比較。
- 8 以後、平仮名字体を示す際は「1」で囲んで、現行仮名字体に近いものはその字体を使用し【あ】のように記す。現行仮名字体でない平仮名字体は、原則として字母で示し【阿】のように示す。同じ字母の平仮名字体が複数ある場合には、アラビア数字で分け、【可1】【可2】のように記す。抽象的な仮名の単位はイロハ四十七にシを加えた四十八のカタカナを()で囲って(ア)のように示す。尚、具体的な平仮名字体の形状は、本稿末の読本三作品平仮名字体使用量総覧にて参照されたい。
- 9 弓張月には(エ)にあたる字体が本文中に現れなかったが月水と八犬伝の【ㄱ】の扱い優先してAに含んだ。
- 10 内田(一九九八b)(二〇〇〇)、久保田(一九九七)(二〇〇二)(二〇〇九)、矢野(一九九〇)(一九九二)、玉村(一九九四)の黄表紙、合巻、滑稽本、人情本などを参照。

参考文献

- 〇〇九)、矢野(一九九〇)(一九九二)、玉村(一九九四)の黄表紙、合巻、滑稽本、人情本などを参照。
- 11 久保田(一九九五)(一九九七)、矢野(一九九〇)に指摘がある。
- 12 久保田(一九九七)で『浮世風呂』の用例が報告されているほか、古くから「けふ」を【介】で書くことがあると述べられている。また、久保田(二〇〇九)の洒落本『傾城買二筋道』に用例がある。
- 13 内田(一九九八a)、久保田(一九九六)(一九九八)に報告がある。
- 14 行頭行末、改行は「1」で表わす。
- 15 久保田(一九九七)で『浮世風呂』に促音表記が「川」の漢字に近い形の字体に偏っていたとある。玉村(一九九四)で『春色梅兒譽美』に同じく促音に用いる傾向が指摘されている。
- 16 矢田(一九九六)参照。
- 17 坂梨(一九七九)に【盤1】が行末に使われる場合が詳しい。
- 18 【満2】は久保田(一九九七)で滑稽本『浮世風呂』、同(二〇〇九)で洒落本『傾城買二筋道』にもみられるが、特徴的な用法は見出されない。
- 内田宗一(一九九八a)「黄表紙・洒落本の仮名字体―恋川春町自筆板下本についての比較考察」『国語文字史の研究IV』和泉書院
- 内田宗一(一九九八b)『修紫田舎源氏』の仮名字体―作者自筆校本と板本の比較考察―『待兼山論叢』三二二号
- 内田宗一(二〇〇〇)「馬琴作合巻『金毘羅船利生纏』の仮名字体―筆耕による表記の改変をめぐって―」『国語文字史の研究V』和泉書院
- 久保田篤(一九九五)「草双紙の用字法―赤本の仮名字体の用法を中心に―」『国語学論集』築島裕博士古稀記念『復古書院』
- 久保田篤(一九九六)「恋川春町『無益委記』の表記―平仮名の字体について―」『茨城大学文学部紀要(人文科学論集)』二十九号
- 久保田篤(一九九七)『浮世風呂』の平仮名の用字法『成蹊園分』三〇号
- 久保田篤(一九九八)『金々先生栄花夢』の文字の用法について『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』汲古書院

- 久保田篤 (二〇〇二) 「江戸時代後期の平仮名・片仮名について」『日本語の文字・表記—研究報告論集—』国立国語学研究所
- 久保田篤 (二〇〇九) 「江戸板本の表記の多様性—洒落本『傾城買』二筋道』の場合—」『成蹊國文』四十二号
- 坂梨隆三 (一九七九) 「曾根崎心中の「は」と「わ」—その仮名遣と仮名の字体について—」『茨城大学人文学部紀要(人文学科論集)』十二号
- 佐藤麻衣子 (二〇〇九) 「享保期浄瑠璃本の仮名文字遣い—『出世握虎稚物語』における「り」「し」「じ」の調査から—」『国文目白』四十六号
- 玉村禎郎 (一九九四) 「春色梅兒譽」における仮名の用字法」(『国語文字史の研究』二 前田富祺・国語文字史研究会編、和泉書院、一九九四年一月)
- 野口義廣 (一九七三) 「浄瑠璃丸本の表記をめぐって—平仮名字体について—」『文獻探究』十二号
- 濱田啓介 (一九七九) 「板行の仮名字体—その収斂的傾向について—」『国語学』第一一八号
- 前田富祺 (一九七二) 「仮名文における文字使用について—変体仮名と漢字使用の実態—」『東北大学 教養部紀要』第十四号
- 三原裕子 (一九九八) 「江戸後期咄本における仮名の用法をめぐって」『国文学研究』第一二六集
- 矢田勉 (一九九六) 「異体がな使い分けの衰退—トの仮名の場合」『国語学論集(山口明穂教授還暦記念)』明治書院
- 矢野準 (一九九〇) 「一九の文字生活—烏屋黄表紙五種の仮名表記の実態を中心に—」『近代語研究 第八集 吉田澄夫博士追悼論文集』武蔵野書院
- 矢野準 (一九九二) 「一九自画作黄表紙の文字遣い—榎本版四種を中心に—」『国語国文研究と教育』二十七号

(いちじ・えい 平成二十五年度大学院博士前期課程修了生)

読本三作品平仮名字体使用量総覧

| 仮名 | 字体 | 月氷 | 弓張月 | 八犬伝 | |
|----|----|----|-----|-----|-----|
| タ | と | 多 | 46 | 133 | 117 |
| | た | た | 46 | 1 | 6 |
| | 堂 | 堂 | 18 | 0 | 0 |
| チ | ち | ち | 49 | 35 | 24 |
| ツ | つ | つ | 20 | 77 | 35 |
| | 川1 | 川1 | 19 | 3 | 29 |
| | 川2 | 川2 | 3 | 6 | 0 |
| | 徒 | 徒 | 9 | 7 | 0 |
| テ | は | 津 | 0 | 1 | 0 |
| | て | て | 115 | 60 | 88 |
| | 天 | 天 | 177 | 350 | 288 |
| | 亭 | 亭 | 5 | 0 | 0 |
| ト | と1 | と1 | 157 | 300 | 318 |
| | と2 | と2 | 79 | 0 | 0 |
| | と3 | と3 | 0 | 55 | 23 |
| | 登 | 登 | 7 | 1 | 0 |
| ナ | 奈1 | 奈1 | 134 | 21 | 209 |
| | な | な | 21 | 83 | 7 |
| | 奈2 | 奈2 | 0 | 101 | 0 |
| | 奈5 | 奈5 | 0 | 2 | 0 |
| | 那 | 那 | 3 | 0 | 0 |
| ニ | 尔1 | 尔1 | 39 | 315 | 301 |
| | 尔2 | 尔2 | 274 | 94 | 226 |
| | に | に | 16 | 1 | 0 |
| | 丹 | 丹 | 0 | 61 | 0 |
| | 耳1 | 耳1 | 1 | 1 | 0 |
| | 耳2 | 耳2 | 3 | 0 | 0 |
| ヌ | ぬ | ぬ | 13 | 10 | 25 |
| ネ | 年 | 年 | 1 | 1 | 6 |
| | ね | ね | 7 | 6 | 2 |
| | 祢 | 祢 | 0 | 0 | 5 |
| ノ | の | の | 287 | 505 | 362 |
| | 乃 | 乃 | 1 | 0 | 11 |
| | 能1 | 能1 | 54 | 14 | 4 |
| | 能2 | 能2 | 1 | 0 | 0 |

| 仮名 | 字体 | 月氷 | 弓張月 | 八犬伝 | |
|----|----|----|-----|-----|-----|
| ア | あ | あ | 113 | 97 | 90 |
| | 阿 | 阿 | 1 | 9 | 0 |
| イ | い | い | 67 | 99 | 95 |
| | 以 | 以 | 21 | 2 | 4 |
| ウ | う | う | 25 | 50 | 27 |
| エ | え | え | 5 | 26 | 6 |
| オ | お1 | お1 | 17 | 47 | 32 |
| | お2 | お2 | 32 | 0 | 0 |
| | 於 | 於 | 1 | 0 | 0 |
| カ | 可1 | 可1 | 155 | 297 | 245 |
| | か | か | 21 | 35 | 38 |
| | 可2 | 可2 | 1 | 11 | 0 |
| キ | き | き | 8 | 75 | 18 |
| | 起 | 起 | 51 | 25 | 108 |
| ク | く1 | く1 | 68 | 144 | 87 |
| | く2 | く2 | 9 | 11 | 4 |
| ケ | 介 | 介 | 13 | 57 | 28 |
| | け | け | 28 | 20 | 63 |
| | 希 | 希 | 0 | 6 | 0 |
| コ | こ | こ | 116 | 153 | 72 |
| | 古 | 古 | 17 | 2 | 23 |
| サ | さ | さ | 28 | 89 | 104 |
| | 佐 | 佐 | 1 | 0 | 0 |
| シ | し1 | し1 | 236 | 344 | 298 |
| | 志 | 志 | 45 | 50 | 30 |
| | し2 | し2 | 0 | 34 | 55 |
| ス | 春 | 春 | 106 | 149 | 128 |
| | す | す | 0 | 9 | 0 |
| | 須1 | 須1 | 35 | 15 | 44 |
| | 須2 | 須2 | 2 | 0 | 0 |
| セ | せ1 | せ1 | 28 | 62 | 92 |
| | せ2 | せ2 | 0 | 4 | 0 |
| | 世 | 世 | 1 | 0 | 0 |
| ソ | そ | そ | 56 | 151 | 64 |

| 仮名 | 字体 | 月氷 | 弓張月 | 八犬伝 |
|----|----|----|-----|-----|
| ラ | ら | ら | 7 | 15 |
| | ら | 良1 | 109 | 0 |
| | ら | 良2 | 0 | 131 |
| リ | り | り | 163 | 312 |
| | 里 | 里 | 30 | 19 |
| ル | る | る1 | 38 | 58 |
| | る | る2 | 71 | 168 |
| | 累 | 累 | 2 | 2 |
| | 類 | 類 | 14 | 1 |
| | 流 | 流1 | 0 | 2 |
| | 流 | 流2 | 0 | 0 |
| レ | れ | れ | 61 | 149 |
| | 連 | 連 | 77 | 48 |
| ロ | ろ | ろ | 44 | 23 |
| | 路 | 路 | 0 | 9 |
| ワ | 王 | 王 | 25 | 37 |
| キ | る | る | 3 | 20 |
| エ | え | え | 4 | 0 |
| ヲ | を | を | 306 | 340 |
| | 越 | 越 | 4 | 7 |
| ン | ん | ん | 27 | 71 |

| 仮名 | 字体 | 月氷 | 弓張月 | 八犬伝 |
|----|----|----|-----|-----|
| ハ | 者 | 者 | 36 | 35 |
| | 八 | 八 | 167 | 347 |
| | 盤 | 盤1 | 16 | 13 |
| | 盤 | 盤2 | 1 | 0 |
| | は | は | 0 | 0 |
| ヒ | ひ | ひ | 32 | 131 |
| | 飛 | 飛 | 25 | 5 |
| フ | ふ | ふ | 60 | 103 |
| | 婦 | 婦 | 4 | 3 |
| ヘ | へ | へ | 72 | 180 |
| | 遍 | 遍 | 13 | 0 |
| ホ | 本 | 本 | 3 | 6 |
| | 保 | 保 | 16 | 32 |
| | ほ | ほ | 0 | 5 |
| マ | ま | ま | 30 | 2 |
| | 末 | 末 | 8 | 74 |
| | 満 | 満1 | 1 | 0 |
| | 満 | 満2 | 11 | 4 |
| ミ | 三 | 三 | 26 | 51 |
| | み | み | 2 | 0 |
| ム | む | む | 19 | 21 |
| メ | め | め | 9 | 24 |
| | 免 | 免1 | 0 | 1 |
| | 免 | 免2 | 20 | 0 |
| モ | 毛 | 毛1 | 55 | 71 |
| | も | も | 0 | 163 |
| | 毛 | 毛2 | 50 | 23 |
| | 毛 | 毛3 | 0 | 0 |
| | 毛 | 毛4 | 3 | 3 |
| ヤ | や | や | 7 | 22 |
| | 也 | 也 | 18 | 34 |
| ユ | ゆ | ゆ | 1 | 3 |
| | 由 | 由1 | 7 | 2 |
| | 由 | 由2 | 4 | 1 |
| ヨ | よ | よ | 50 | 89 |